

9 関係文献

奈良国立文化財研究所「藤原宮出土木簡(三)」一九七八年

(鬼頭清明)

- |      |                               |                  |
|------|-------------------------------|------------------|
| (13) | 伊都支宮奴婢×                       | 091              |
| (12) | □□七枚 慶雲三年三月一日                 | 091              |
| (11) | 『染』安麻呂 『染』恵□×                 | 091              |
| 井戸   |                               |                  |
| (10) | 「綾海高□部行乃古三斗                   | (154)×10×4 093   |
| (9)  | 「海評佐々里乃利」<br>相多               | 162×19×3 091     |
| (8)  | 『春日』奴安麻×                      | 091              |
| (7)  | 御史官×                          | 091              |
| (6)  | 「三野評物部色夫知                     | (154)×16×3 092   |
| 内濠   |                               |                  |
| (5)  | 「志麻國嶋郡塔志里戸主大伴マ嶋」<br>「志麻」      | 169×17×4 091     |
| (4)  | 「若狹國小丹生郡手卷里人□×                | (177)×(14)×2 091 |
|      | 「斗」<br>大根四把×                  |                  |
| (3)  | 「尾治國知多郡贊代里」<br>「丸部刀良三斗三年九月廿日」 | (221)×(24)×3 093 |

奈良・紀寺跡

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村小山
  - 2 調査期間 一九七八年(昭53)一月～二月 第三次二期
  - 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
  - 4 調査担当者 泉森蛟・藤井利章
  - 5 遺跡の種類 寺院跡(紀寺)
  - 6 遺跡の年代 飛鳥—平安初期
  - 7 遺跡および木簡出土遺構の概要  
紀寺という寺院は『続日本紀』天平宝字八年七月条にみえるのみで、詳細は審らかでないが、その記事により庚午年籍の作成された天智九年(六七〇)ころの創建で、紀氏を檀越とする寺であったと推定されており、平城遷都とともに平城京左京五条七坊に移り、璉城寺と号した。
- 当初の寺地は明日香村小山の「キデラ」の小字名を遺す付近であったと伝えられ、明治初年までは礎石も残存したらしいが、周縁にいわゆる雷文を飾った特徴的な複弁蓮花文軒丸瓦を出土することによって知られていた。この寺址は藤原京左京八条二坊に当たり、右京の薬師寺と同じく八条大路に面していたとみられるが、ここに県営飛鳥緑地運動公園が建設されることになり、昭和四八年度から三次にわたって発掘調査が実施された。

その結果、南大門・中門・金堂・講堂・回廊、および南面築地大垣が検出され、東塔址は調査されなかったが、それと対称位置には西塔はなく、約二メートル間隔で東西に並ぶ二本の掘立柱の存在したことも明らかになった。調査は県有地に限定されたため、伽藍は西半分が発掘されたに止まったが、その規模、堂塔の配置が判明し、

また南大門は全面調査されたので中軸線が知られ、さらに南面築地大垣の東南隅も検出されたので寺域もほぼ明らかとなった(第1図参照)。

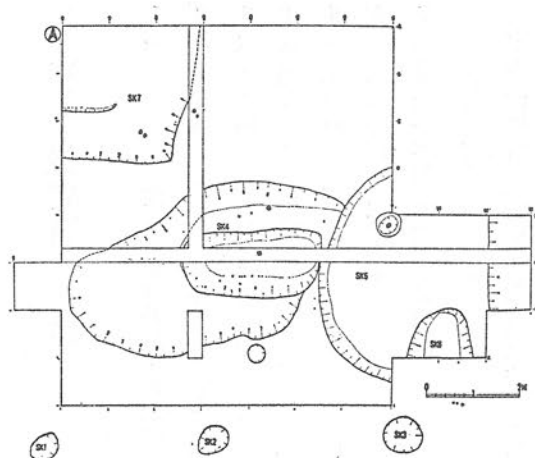
木簡が出土したのは寺域の南限を画する南面築地大垣から約四〇メートル南で、推定八条大路よりも南に当たる。東には飛鳥川の右



第1図 紀寺跡遺構略図 2: 木簡出土地

岸に断続的につづく丘陵の一つ、「西山」があり、西にもこれと並行して小丘陵が残っている。この地域は黒色泥土の堆積する地盤軟弱な低湿地であつたらしく、そこに多くの不整形な凹地状土壌があり、木簡はそのうちの数個所の土壌から土器・木製品などともに出土した(第2図参照)。紀寺南大門創建ごろ、不要となったそれらの品々を前面の凹地に棄て、その上を整地したものと推定されている。木簡に伴出した須恵器・土師器は第3図の如くで、藤原宮出土のものと同型式で七世紀末―八世紀初とみられる。木製品には横櫛・糸巻・琴柱・人形・曲物・漆の付着したヘラなどがあり、他に土馬・ふいご羽口なども同時に出土した。ただし土壌内からは瓦片の出土をみない。

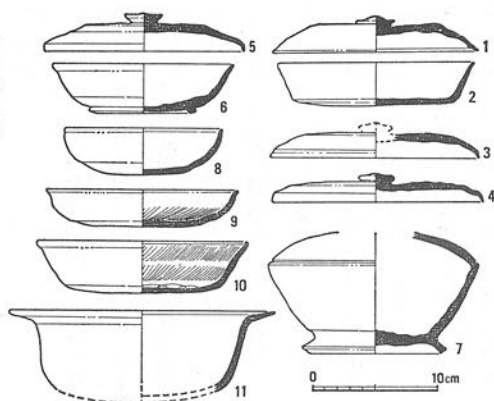
## 8 木簡の釈文・内容



第2図 木簡出土遺構図

あけられている。表裏に墨書があり、表上端右隅にも墨書があるらしいが、判読できない。「拾」と仮りに読んだ字は「記」「把」と同じというが、全体の文意もなお明らかでない。(2)(3)は上部に切欠きのある付札で、とくに(3)の切欠きは珍しいが、ともに下

- (1) 〔□奉<sup>(マ)</sup> 拾上物俵六<sup>(カ)</sup> 〔五十丸<sup>(カ)</sup> 四〇〇<sup>(カ)</sup> 〕  
175×30×5 011
- (2) 〔〓山田里□<sup>(マ)</sup> 〕  
(25)×19×4 039
- (3) 〔〓三野里□<sup>(マ)</sup> 〕  
(25)×21×4 039
- (1)は土壇4、(2)は土壇3、(3)は土壇7から出土。他にも上部に切欠きがあり、下部の欠損した付札が三点出土しているが、墨書は消えていて判読できない。(1)は紐目で、ていねいに整形され、下部はやや薄くなっているが、上端から二ミリ下に径六ミリほどの穴があけられている。表



第3図 木簡の伴出土器 (1~8・須恵、9~11・土師)

部は欠損していて、墨痕も剝落が著しく、里名だけしか判読できない。貢進物付札らしいが、山田里・三野里とも全国的に多く、どの国のものかわからない。紀寺創建にかかわるものとすれば興味深い。

## 9 関係文献

泉森皎「明日香村紀寺跡発掘調査概報」(奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報』一九七七年度)

(泉森 皎・岸 俊男)

一九七八年